



# 那須与一伝承館通信〈第21回〉

## ○那須資胤告文写

今回は那須与一伝承館が収蔵する資料の中から、那須資胤告文写を紹介いたします。

本品は、永禄三年(一五六〇)三月、那須資胤(？〜一五八三?)が宮原八幡宮(現在、那須烏山市宮原)に「神殿内陣」の「御戸」を寄進した際に記した告文(神に申し上げる文書)です。資胤が佐竹氏との共同作戦で白河(福島県白河市)へ出兵し、白河晴綱(一五二〇?〜七三)父子や蘆名盛氏(一五二一〜八〇)らと小田倉(福島県西郷村小田倉)で戦ったことが記されています。この小田倉の戦いで、資胤は白河・蘆名連合軍を破り、勝利を収めることができました。この戦勝を記念して、宮原八幡宮に「御戸」が寄進されたものと思われます。

このように、戦国時代の武士たちは、互いに所領をめぐって「合従連衡」を繰り広げており、那須氏も佐竹氏との間に同盟を結び、生き残りを図ろうとしていたのです。

現在、この資料を展示しております。ぜひ一度、戦国時代の那須氏の古文書をご覧ください。

## ○那須資胤告文写

奉果神殿内陣之御戸三間、右意趣者、藤原資胤為佐竹合力向奥州白河出陣

之砌、諸神前祈誓言、八幡大菩薩是日域宗廟之神故、守朝家慈箕裘之家、抽諸神佐武勇之将、依之不捨和光利物之本誓者、立決勝利、親討滅敵、挙名諸州、継先祖之家風、伝誉於子孫給、偏奉仰神慮之誓約、于時永禄之年上章澄灘、向号小田倉地成働処、白河晴綱親子催五百余騎之人数、既及防戦、味方一千余騎之中勇健兵共、不守大将之下知、晋一陣追捲、鬪戦軍数度、然所回国黒川之諸卒二千余騎合力、従物陰俄差出、竝馬頭、団諸卒、見敗北之気色、所資胤馬立進、手勢二百余騎引纏、晋太鼓、振国時、勇兵等得力、七里間追返黒白両家之勢、振誉於八州、進威東山東北陸之巷、是併依神徳、挙名所也、仍而為備後代之亀鏡注之畢、

同細工幡州之住玄照坊、于時瀧泰平寺居住之砌、檀那任御懇望、彫作之畢、実名仏忠  
永禄三年庚申臘月吉日 修理大夫資胤



那須資胤告文写 (那須家所蔵・当館寄託)

## ■問い合わせ

那須与一伝承館

TEL (20) 02220

# 彫刻

## 市内で作られた作品とその作者

# 周遊 ④3

このコーナーは、「那須野が国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

この作品は東地区公民館の入口左側に設置してある作品です。

ギリシャ神話における天才的な発明家であり、建築家であるダイダロスは、クレタ島のミノタ王に仕

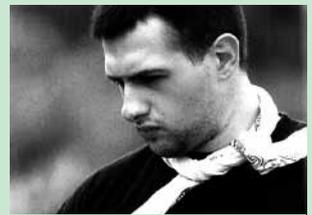


**僕はもう飛べない**  
フルヴィオ・メローリ  
イタリア共和国 2003年

えていましたが、ある事件をきっかけにミノタ王の不興を買ひ、息子と一緒に幽閉されてしまいます。脱出を画策したダイダロスは鳥の羽を口ウで固め翼を作り、空を飛ぶことに成功しました。その際、父の助言を忘れ、太陽に近付き過ぎた為に口ウを溶かし、墜落してしまった息子が

イカロスです。

長い幽閉のすえ、ついに手に入れた1対の翼は、イカロスにとって希望そのものであったはず。そしてもう一つの希望の象徴は太陽。自由に焦が



フルヴィオ・メローリ氏

れた彼にはもうダイダロスの声が聞こえることがなかったのでしょうか。イカロスは刹那の希望を手に入れた故に、果てのない絶望に落ちることになったのです。また、自らの発明のせいで息子を失うこととなったダイダロスはどのような気持ちで大地に引き寄せられる彼を見ていたのでしょうか。題名の「僕はもう飛べない」はいったい、誰の言葉でしょうか。

作者はイタリア出身のフルヴィオ・メローリ氏。ペローナやユーゴスラビアの国際シンポジウムに参加したのちに本シンポジウムに参加をしました。

## 設置場所案内図(★印)



## ■問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718